

私が痛みを感じたとしても、それが夢なのか、どうやって分かるというのだろう。

写真学科
圓井 義典

Even if I feel pain, how do I know if it's a dream?

Department of Photography
MARUI Yoshinori

解説

ロウソクで火傷をしたときの痛み、ショートケーキの甘さ、ピアノが奏でる曲の美しさ、タブローの輝くような色彩など。情動的なものであれ知覚的なものであれ、それら感覚的なものはただ、事物と私とのあいだにある感覚そのものであって、事物そのものではない。このことは世界そのものと私(たち)とのかかわりにおいてもあてはまる。つまり、世界に対しても私(たち)はこのような感覚器官を通じたかかわり方しかできないのであって、世界そのものの全容に触れることは決してできないのである。カント以来このように考える者は少なくないが、哲学者カントン・メイヤスは彼らのことをひとまとめにして「相関主義者」と呼ぶ。

またメイヤスは、相関主義は主観性と客観性の領域をそれぞれに独立したものとして扱おうとする行為を無効にしてしまうものであるとも指摘する。なぜならば、彼らの主張にしたがえば、世界「そのもの」と「私(たち)にとっての」世界とを比較することはできないし、そうであるがゆえに、世界と私の関係に帰せられるものと、世界にのみ属するものとを区別することができないからだ⁽¹⁾。

確かに相関主義者たちがそう主張するように、私に与えられたもの、すなわち感覚器官を通じて生じたものを基準にして世界と私とを区別することはできないにしても、私のうちに何らかの感覚的なものが生じたのは、そのきっかけとなる何らかの刺激が私に与えられたからであることには変わりはない。

では、なぜ私(たち)は常に世界から刺激を与えられ続けているのか。私とはかかわりのないある絶対的な自然法則で成り立っている世界から、単にたまたま刺激が与えられ続けているというだけなのだろうか。時にそれはあまりにも辛く、与えられることそのものを拒みたくなることすらあるというのに。

本作は、哲学的アプローチや自然科学的アプローチとは別のやり方として、写真を用いてあらためて世界と私(たち)とのかかわりを考えるきっかけとなることを期待し、制作されたものである。それは論理実証主義的アプローチによって世界と私(たち)とのかかわりについて論じるためのものではないが、かといって、写真という画像を私に感覚的に与えられたものの痕跡や類比物と見なすことができるという理由によって、何らかの感覚的なものを再現前化しようとするものでもない。

むしろ、私(たち)がほとんど無意識に行なっている写真もしくは画像とのかかわり方、すなわち読解を混乱させることを一つの目的とするものであり、そのために形式的には写真による新しいモンタージュを試みている。それは一筋のストーリーや特定のメッセージを示唆する組写真とはまったく異なった性質のものであり、いわば別種のコラージュであり、平面上のインスタレーションでもある。

この新しい形式が招く読解の混乱は、私(たち)がほとんど無意識に行なっている世界とのかかわり方、すなわち理由律を求める自らの姿をあらわにし、それとは別の可能性にも思いを巡らせるきっかけとなるかもしれない。それが本作の二つ目の目的である。

(1) カントン・メイヤス『有限性の後で——偶然性の必然性についての試論』千葉雅也ほか訳、人文書院、2016年











